

詩編 第119編 130節

「みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまのない者に悟りを与えます。」

ある研修会のため、長野県の山深いキャンプ場に向かった。山間なので日の出が少し遅めになる。早朝の静まり返ったロビーでひと時を過ごし、明るくなり始めたひかりをカーテン越しに感じ、左右に開いた。ガラス戸越しの前にかすかに流れゆく朝もやが見える。そのもやに包まれている木立がそびえ立つ森がある。山間地帯が生み出す特有の、すがすがしい朝の空気、空間、みどりが演出する創造の美がある。カーテンを開かなければ見えない光景である。

みことばの戸が開くと、まさしくこの体験のような朝の出来事だ。みことばが聞こえると、光が差し込む。閉じられていた聖書が開かれると、開いている者に光が差し込んでくる。それまで見えていなかったことが光に照らされ見えてくる。わきまのない者が見える。わきまのない自分が見えてくる。わきまのない自分だからこそ、聖書を開かなくてはならない。お語りになる主に聞かなくてはならない。

すると、悟りが与えられる。悟るのではない、与えられるのである。カーテンを開く前から森のたたずまいは控えていた。開いた者に創造の美が入り込んだ。聖書を開いた者に、光が差し込んだ。

2024年6月15日